

# 「あ」の中核的機能とその外延的事象について

松 岡 みゆき

## 要 旨

本稿は、従来の品詞分類で「感動詞」に分類される一音節語「あ」について、それが運用されることの意味（聞手の解釈にどう影響するか）という観点から考察し、その機能を提示したものである。「あ」は①弁別刺激の同定・描写、②弁別刺激に関連する情報の取出し、③弁別刺激からの状況判断といった話手の反応（これをまとめて本稿では「気づき」と表現する）を示すマーカーであると考えられる。このマーカーを用いることで、聞手に対して（聞手のおこなう解釈に対して）特定の働きかけをおこない、結果として、言語場の創設または聞手に配慮することによる言語場の保持に貢献する。

## キーワード

「あ」、感動詞、一音節語、言語場の創設、言語場の保持

## 目 次

1. はじめに
2. 前提となる考え方——「あ」は伝達の意味を持つ言語形式か？
3. 従来の「あ」の捉え方とその問題点
  3. 1. 辞書の記述とその問題点
  3. 2. 先行研究の記述とその問題点
4. 考察方法
5. 考察
  5. 1. 知覚対象を明示する表現が後続する「あ」

5. 1. 1. 言語場の創設
  5. 1. 2. 聞手の面子保持
  5. 1. 3. 話題転換補助——「区切り」マーカーとしての「あ」
  5. 2. 訂正表現が後続する「あ」
  5. 3. 謝罪表現が後続する「あ」
  5. 4. 否定表現が後続する「あ」
  5. 5. 仮説の検証
  5. 6. 結論——「あ」の中核的機能と外延的事象
6. おわりに

## 1. はじめに

本稿は、従来「感動詞」に分類されながらも、言語形式として十分な考察がなされていない「あ」を、特定の機能を持つ一音節の語と考え、その中核となる機能と、それが運用<sup>(1)</sup>されることの意味とを明らかにする。運用されることの意味とは、「あ」の有無が聞手の解釈にどのような変化をもたらすかということであり、この観点から「あ」を考察していく。以下では、まず2節で「あ」が特定の機能を持つ言語形式であることを確認した上で、3節で辞書の記述と先行研究において「あ」がどのように捉えられてきたかを確認し、その問題点を述べる。4節で本研究の考察方法を示した上で、5節で考察をおこない、その結果を示す。最後の6節で本稿で述べたことをまとめる。

## 2. 前提となる考え方——「あ」は伝達的意味を持つ言語形式か？

「あ」の機能について考えるにあたり、まず「あ」が言語形式として認められることを確認する必要がある。つまり、「あ」がその場の状況のみに支えられ、その場限りで発せられる特定の意味を持たない音声ではないことの確認である。森重(1959)の用語を借りるなら「あ」の内容が「伝導」ではなく、聞手に「伝達」される類のものであることを示す必要がある。<sup>(2)</sup>「伝達」であって初めて共通の基盤、一般的なルールとしての「あ」

の機能について問題にし、その抽出に向かえるからである。結論を言えば、「あ」は言語形式として扱えると本研究は考える。理由は次の2点にある。まず、例を見ると「あ」の使用には一定のパターンがある。逆に使用が自然ではない発話にも規則性がある。これは「あ」が伝導的に意味を生じさせる単なる音声ではないことを示唆している。そして「あ」は一語文のように主述関係を内包する形式でもある。<sup>(3)</sup> 例えば「あ！」はその指し示す内容を「犬がいる」という単文として反省的に対象化できる。主述関係を内包することこそ、「あ」が伝導的にそれが表すものを伝える言語形式であることの証である。<sup>(4)</sup> なお、本研究では「あ」の他、「あっ」と表記された例を考察対象とし、また両者を暫定的に同様のものと考えて考察する(本文では「あ」と記す)。これは富樫(2005)が「“あっ” “わっ” という文字列で表記されるからといって殊更に促音(声門閉鎖)が強調されているわけではな」く「声門閉鎖の強弱を弁別の素性としては捉えず」両者を考察対象としていることに賛同し、それに倣ったものである。逆に長音化した「ああ」「あー」が表すものは辞書の記述から見ても「あ」とは異なる部分が大きいため<sup>(5)</sup>、これらの形式を考察対象としない。また本研究は「あ」の指示する内容を「意味」ではなく「機能」と呼ぶ。これは「あ」が、内容語を持つような具現的对象としての意味を持たない辞、機能語であるためである。

### 3. 従来の「あ」の捉え方とその問題点

#### 3. 1. 辞書の記述とその問題点

これまで「あ」がどのように捉えられてきたかに関して、まずは国語辞典の記述を確認しておきたい。次の1が『新明解国語辞典第7版』、2と3が「デジタル大辞泉」の記述である。

1. あ：(感動詞) ①呼びかけの声。「あ、君、ちょっと」②急に驚き(思い出し)などした時に出す、思わず発する声。(①②とも「ああ」「あっ」とも言う)
2. あ：(感動詞) ①何かを急に思い出したりしたときに思わず発する語。

あっ。「あ、しまった」②呼びかけに用いる語。はい。「主人あつと言え  
ば郎等こと出づべき体なり」(盛衰記:六)③応答に用いる語。はい。「い  
かがはせんとて、ただあつと、言請けをしゐたり」(古本説話集:六七)

3. あっ:(感動詞)①驚いたり感動したりしたときなどに思わず発する語。  
「あっ、忘れた」「あっ、雪だ」②承諾したことを示す応答の語。はい。「少  
し存する旨あれば、急にあつとも申されず」(浄・国性翁)

1～3の記述を見ると「呼びかけ」「応答」「承諾」といった言語行動、「急  
に思い出す」「驚く」「感動する」といった話手の認知的事象が「あ」の表  
すものとされている。しかし次元の異なる観点でのこれらの記述は、その  
関係性や構造、そしてそれらを導く抽象的機能を示さないと「あ」の本質  
には辿り着けない。また、「デジタル大辞泉」では「あっ」の他「えっ」「おっ」  
「わっ」のいずれにも「驚いたとき」に発するものという記述がある。表  
す複数の意味の中に他の形式と共通するものがあることは具体的意味のレ  
ベルにおいてはあり得ることだが、この4つの形式に共通していることを  
考えると、それが一音節語であることが持つ機能であると考えたほうがよ  
さそうである。このように辞書の記述は厳密に「あ」が表すものを記述し  
てはいないと考えられる。

### 3. 2. 先行研究の記述とその問題点

森山(1996)では感動詞を分類・整理するにあたり情動を「泉」に例え  
るモデルを用いている。内部から沸き上がるタイプの情動を表すものを  
「内発系感動詞」、何かの状況に遭遇してそれをきっかけとする急激な情意  
的変動を表すものを「遭遇系感動詞」とし、「あ」を未知のもの(新情報  
や新しい事態)との遭遇を表すものに位置付けている。「あ」は「驚き、  
つまり未知の事態との遭遇に対する反応として最も未分化な形式」(p.56)  
とされている。

田窪・金水(1997)は、そこで述べられていることが内省に基づくもの  
であり、網羅的な考察ではないと断った上で、「あ」「あっ」「はっ」等を  
「自分で発見した情報を新規に登録する際の標識」であり、「予期していな

かったにも関わらず関連性の高い情報の存在を新規に登録したということを表すもの」とその機能を記述している。森山（1996）、田窪・金水（1997）では「あ」の一側面が確かに捉えられてはいるが、これらの言語運用における話手と聞手の相互関係が考えられていない記述だけでは「あ」の使用は予測し難い。

富樫（2005）も「あ」に聞手の存在を前提としない使用があることから、伝達の側面と機能的側面をわけて機能的側面からの記述を重要視している。<sup>(6)</sup> 富樫では同じ「驚きを表す」形式であると考えられている「わ」との共通点と違いを考察する中で、「あ」を「変化点の認識を示す」「心内で何かが変わったことを表す」形式であると記述している。<sup>(7)</sup> 森山（1996）、田窪・金水（1997）との違いについて富樫（2005）は、新規情報かどうかをその意味記述に含まないことにあるとしている。富樫（2005）は「あ」のこの機能的意味が本質の意味であり、聞手による解釈により「驚き」という伝達の意味合いが認められると考えている。しかし、実際にコミュニケーションは情報の取り込みが常に起こっており、「変化点」の連続である。それを明示することによって、談話展開にどのような変化・影響があるかという点に「あ」を使用することの意味、すなわち「あ」の機能が見て取れると本研究は考える。

#### 4. 考察方法

前節の通り、先行研究では、「あ」の使用を十分に予測し得る記述にいたっていない。また、話手の立場からしか見ていない意味記述と実際のコミュニケーションのあり方には大きなずれがある。実際のコミュニケーションにおいて聞手の解釈はより重要なものである。聞手の解釈により発話は意味づけられる。<sup>(8)</sup> 会話の展開は、その解釈した意味により次の発話がなされる。つまり聞手の解釈は会話の展開の方向を決める。聞手の解釈と話手の意図に齟齬があれば話手は次の発話でそれを修正しようとするからである。このように聞手の解釈は会話の展開を指揮している。本研究は、その聞手の解釈を考察に用いることが必要であると考え、それがコミュニ

ケーションの展開にどう関わっているかを重視する。話手の心的操作だけで独我論的に捉えても「あ」を運用することの意味は見えてこない。聞手にとっての「あ」の使用による解釈の変化、聞手のための「あ」の使用を考える。「あ」が使用された時とされない時、それぞれの聞手の受け取り方（聞き手の解釈）の違いを考える。

考察にあたってはドラマ・映画のシナリオ、ライトノベル、漫画の中の例を中心に用いる（基本的に話手・聞手という2名の間の会話を用いる）。これらのデータを用いる理由は、自然会話には本筋から離脱する等の不規則な談話展開が頻繁に起こり得、規定から外れた使用（いわゆる誤用）があっても、様々な非言語的要因が支えとなり会話が崩壊することなく続く。このような自然会話を対象とした考察が必要であることは言うまでもないが、「あ」の出現にみられる規則を洗い出し、そこから「あ」の機能を導き出す作業を効率的におこなうため、本研究では逸脱の少ない、しかし実際にドラマ等で用いられている自然な会話として、上記の会話を用いる。

## 5. 考察

本節では「あ」をそれに後続する表現の違いにより5.1から5.4に分けて考察する。「あ」の運用により実現される解釈を、「あ」を用いない場合との比較において検討する。つまり、「あ」の運用によって変わる発話の解釈を見ることによって「あ」の中核的機能を抽出していく。以下では5.1で「あ」に知覚対象を明示する表現が後続する場合、5.2で訂正表現が後続する場合、5.3で謝罪表現が後続する場合、5.4で否定表現が後続する場合を考察し、「あ」の中核的機能を抽出する。続く5.5では、5.4までで抽出した「あ」の中核的機能の妥当性を裏付けるため、5.4までで取り挙げたもの以外の「あ」の運用事例が、本研究が提案する「あ」の中核的機能から説明可能であることを示す。その上で6節において「あ」の全体像を示す。

## 5. 1. 知覚対象を明示する表現が後続する「あ」

ここでは「あ」にその知覚対象を描写する表現が後続する場合を、「あ」の運用効果とも言える、「あ」の使用がもたらす聞き手による解釈の違いにより5.1.1～5.1.3に分けて見ていく。

### 5. 1. 1. 言語場の創設

まず知覚対象を描写する表現の中でその対象が事物の場合の例を見ていこう。これは話手はその場の環境の中の事物を弁別刺激<sup>(9)</sup>とし、それを描写する反応に「あ」を用いるものである。この場合いわゆる同定反応である。<sup>(10)</sup> 1は弁別刺激を「モスキートゥ」と同定し、それが「あ」の後に明示される。

1 さおり：あっ、モスキートゥ

トニー：それは「モスキート」だよ (ダーリン2)

話手が同定対象を明示しない（「あ」に後続させない）場合、その後に関手の疑問詞疑問文が続く例が多く見られる。

2 X：あっ

Y：何？

X：救急車 (筆者が経験した例)

これらの例で「あ」は、眼前の事物を知覚し、弁別刺激としてそれを受け取り、それを「蚊」や「救急車」とであると同定する反応に直結している。つまり「あ」が「蚊がいる」「救急車がいる」という事態を表している。これは一語文「花！」が「花がある」という意味を内包していることと対応する。1または2で「あ」を用いず弁別刺激となる事物の名称（モスキート、救急車）のみを発話した場合はどのように解釈されるだろうか。その場合、事物の同定との解釈のみならず、読字行動や音声模倣行動等の可能性も排除できない。「あ」が用いられれば同定であると解釈されるだろう。

この場合の「あ」の使用がもたらす解釈の変化について考える。2の例のように「あ」の使用は、他者の介入を促す。1も聞き手に向けた情報伝達ではないにも関わらず、話手の発話により（「それは『モスキート』だよ」と）聞き手が介入する。それ以前に会話が始まっていない場合、話手の発話

に他者が介入したその時点で「言語場」が成立する（これを本研究では言語場が「創設される」と表現する）。ここでいう「言語場」は2者以上の者がその場に存在しても、その条件のみによりそれが存在すると考えられるような静的なものではなく、話手の発話に、他者が反応をすることにより創られる動的なものである。<sup>(11)</sup>

同様の例は、次に見るように弁別刺激が「のちに聞手となる可能性のある他者」の場合（3、4）や、知覚した事態の場合（5、6）である。

3（雑貨屋から出てきたみくり。風見とぼったり）

風見：あ

みくり：ああ！どうも

風見：買い物ですか（逃げる）

4 A：あ、有川さんだ。 こんにちは～

（有川、気付かない）（いつか）

5 トニー：あっ

さおり：どーした!?

トニー：今見てたページの内容を取っておきたかったからコピーしようとして……

なんか指が混乱して、そのページ閉じちゃった……

（ダーリンの頭2）

6 さおり：あっ、またやった。 もーこういう字ってことにしてくれないかなー

トニー：どうしたの（ダーリンの頭2）

弁別刺激が「他者」の場合、結果として、その他者に対して直接的に言語場の創設を働きかけることになる。この点が弁別刺激が物の場合との違いである。物の場合は間接的な働きかけ、つまり質問やコメントを「促される」ことによって結果的に言語場が創設される。事態が弁別刺激となる場合も物の場合と同様、言語場の創設に向けては間接的な働きかけである。

以上のように、描写対象を明示する表現が後続する場合、「あ」は弁別刺激を描写（物や人なら同定）するという反応を示し、それが結果的に、

聞手となる他者の同定である場合は直接的に、事物の同定や事態の描写であれば間接的に、聞手の介入が促され、これが言語場の創設に向かわせることとなる。

### 5. 1. 2. 聞手の面子保持

直前の相手の発話を弁別刺激とし、それと関連する情報を述べる際に「あ」が用いられる場合がある。例えば7の例では「魚に塩を加えて発酵させた時にできる汁」という相手の発話を聞いて、話手はそれに関連する情報（ここではその名前である「魚醤」）を引き出し、それが「あ」に後続する。「あ」が弁別刺激から関連情報を引き出した（思い当たった）ことを示している。

7 トニー：昔福建省廈門周辺で今の「ケチャップ」に近い発音の言葉があって。意味は「魚の汁」

さおり：さ……魚の汁!?

トニー：そう魚に塩を加えて発酵させた時にできる汁

さおり：あ「魚醤」ね。日本でも「しょつつる」とか「いしる」があるね  
(ダーリンの頭2)

次の例では、「『一号』と言えば」という表現からも分かるように相手（トニー）の発話に出た「NO.1」に関連する情報が「あ」に後続している。

8 トニー：日本語の「大」と「小」って便利だよー

さおり：あれ？英語にはないの？

トニー：下品でも子供っぽくもない表現は思いつかないね。病院とかで使う言葉はあるんだけど友人同士では言わないし……  
「NO.1」や「NO.2」もちょっと子どもっぽいなあ……

さおり：あっ中国語でも「一号」と言えば「小」のことでトイレを指す時もあるよね

トニー：基本的には日本と同じ「厕所」が多いと思うけどね

(ダーリンの頭2)

これらの例において「あ」を使うことで解釈にどのような変化があるだろうか。弁別刺激からそれに関連する情報を取り出したことを示す「あ」を

つけることにより、当該のこと（「あ」に後続する内容）が「その場で気づいたこと」として聞き手に示される。これが、当該内容が「わかりきったことではないもの」という解釈を生み出し、それにより、直前の発話をした（話手の述べた情報を自分のほうから出せなかった）聞手の面子が保持されると考えられる。これは「あ」を用いることによって生じる解釈である。

### 5. 1. 3. 話題転換補助——「区切り」マーカーとしての「あ」

ここでは話題を変える、つまり連続していない内容を導入する時に使用される「あ」を取り上げる。ここで挙げる例も「あ」は弁別刺激に関連した情報を取り出したことを示すマーカーであると考えられる。9は話手が聞手という存在を知覚し（つまり聞手を弁別刺激として）聞手に関連する（話手が聞手と共有している）対象（アレ）を「用意したかどうか」、10はその場で知覚した対象（これ）を弁別刺激とし「いい」という情報を取り出している。

9 ナツキ：土屋さん、おはようございます！

百合：おはよ。あ、あれ、アレ用意した？

ナツキ：あれってなんですか (逃げる)

10 みくり：やっさん、今日は食べよう。私の奢りだから！

安恵：デザートもね。あ、これいい！ さりげなく可愛いランジェリー

みくり：かわいい…… (逃げる)

これらの例で「あ」を用いた場合の解釈の変化を考える。ここでは、弁別刺激の存在を示すことで、つまり新たな対象が弁別刺激となり、その反応として新たに取り出された情報であることを明示することにより、話手の発話の話題転換の「突拍子のなさ」を緩和する。「あ」がないと、話題転換が急で不自然な発話となる。前の発話と後の発話の間に内容的隔たりがある場合（関連事項でない場合）、その間に「新たに弁別刺激から引き出された情報である」ことを「あ」で明示することで、聞手はその展開を受け入れやすくなる。

これは逆に同じ話題が続く場合に、発話が立て続けに行われることによる「畳み掛け」の印象を緩和する働きにもなる。

11 トニー：そうだね。「トイレに行く」って少し恥ずかしいけど行かなきゃいけないから少しでも楽しくみたいな

さおり：日本では山に行ったときくらいかな

トニー：タイでも女性はそう言うんだって。男性は「ウサギ狩りに」。  
あっトイレのこと「お手洗い」とも言うでしょ。それ「みたらし団子」と関係あるんだって

さおり：ええっ (ダーリンの頭2)

11では「トイレに行く」という話題について「タイでも女性はそう言う」「男性はウサギ狩りに(と言う)」といった発話が続く。さらにトイレの話題を続け、「お手洗いとも言う」という情報を続ける際に、改めて当該の話題(弁別刺激)から取り出した情報であると示すことで「区切り」ができ、畳み掛けを緩和すると考えられる。またこれを利用して、無理に話題を変えたい場合に「区切りマーカー」として働く「あ」を使用する場合がある。

12 みくり：(意を決して)あの、平匡さん、さっきの――

津崎：あっ!

みくり：!?

津崎：月曜の仕事の準備を忘れてました。すぐに取り掛からないと (逃げる)

以上見てきたように、本小節の「あ」は言うなれば「区切りマーカー」として聞手の解釈を助け、言語場の保持に貢献していると考えられる。その点から見れば、5.1.2の「あ」も聞手の面子を保つことにより言語場が破綻することを避けている。5.1.1の「あ」が言語場の創設に関わることも考え合わせると、「あ」は音声言語を用いたコミュニケーションの成立と維持に関わる機能を担う形式であると考えられる。

## 5. 2. 訂正表現が後続する「あ」

次に「あ」に訂正表現が後続する例を見ていく。次の例を見てみよう。

- 13 津崎 : さすがに、嫁入り前の女性を、住み込みというのは  
みくり : ならいっそ、結婚しては！  
津崎 : !?  
みくり : あっ、結婚といっても、就職という形の結婚というか  
津崎 : ??? (逃げる)

13は「ならいっそ結婚しては(どうか)」という自身の発話を弁別刺激として、それが「結婚の提案をした」ことになる気づく。そしてそれが話手にとって意図しないことであるため「結婚するといっても、就職という形の結婚というか」という後続の発話で補足・訂正している。14は「私は平臣さんが一番好きですけど」という発話(弁別刺激)が「好きであるという告白」という話手にとって不都合な内容と判断し、「好きって変な意味じゃなく」という発話で訂正している。つまり、「あ」は話手が自身の発話(弁別刺激)の意味内容を改めて意図したことではない、不都合な内容であると気づき、それを補足・訂正する発話が後続する。

- 14 みくり : 私は平臣さんが一番好きですけど  
津崎 : ……  
みくり : しみじみとしっくり、落ち着いて  
津崎 : ……  
みくり : あ。好きって、変な意味じゃなく！またしても突拍子もないことを  
津崎 : ……  
みくり : 都会のキラキラより渋い方が好きというか。すいません何を言っているのか  
津崎 : …… (逃げる)

以上の例では、「あ」によって「慌て」といった話手の情動が表される。これは「あ」で前出の自分の発話(弁別刺激)の内容が不都合なものと判断し、それを示すことが「今、自分の発話の意味に気づき、即時それを訂正、補足する」ことを示すことになり、それによって「慌て」の解釈が生じると考えられる。<sup>(12)</sup>

### 5. 3. 謝罪表現が後続する「あ」

次に「あ」に謝罪表現が後続する場合を考える。次の例を見てみよう。

15 みくり：時間を分け合う……もしかしたら風見さんは、相手の気持ちも大事なんじゃないですか

風見：え？

みくり：相手を尊重してるからこそ、自分だけでなく相手の時間も同じように奪いたくない。自分勝手なようで実は、優しいのかもしれない

風見：……

みくり：あ。すいません、心理学部の癖で

風見：いえ、興味深い。奥さんは気になりませんか？結婚して自分の時間、減ったでしょう (逃げる)

この例で話手は直前の自分の発話（弁別刺激）が「相手を分析するような発話である」と気づき、謝罪している。次の例も同様に自分の発話が「相手にとって嫌味な発話である」と気づいて謝罪が後に続く。

16 栃男：風呂掃除もした！

みくり：どれくらい？

栃男：月に2回……だったかな

みくり・桜：え？

葵：たまの風呂掃除でドヤ顔されてもねえ

一同：！

(庭に葵と娘・梢、居て)

葵：あ、すいません。ついちがやさんを思い出して

(逃げる)

本小節の例は前出の発話が弁別刺激となり、それが不都合なものであると気づき、謝罪するものである。「気づいて即時に謝る」ということから「慌て」が表現され、「しまった」という話手の情動を帯びた発話になると考えられる。次の例には「あ」に謝罪表現が後続してはいないが、義母の発話に対して「あ」を用いることなく間髪入れず「持ってきてないです」と

応じる場合に比べ、「あ」を使用すると義母の期待に応えられないことに対する話手の「しまった」といった情動が読み取れる。この場合「本かなにか……見せてもらえる？」という相手の発話を弁別刺激とし、本を持ってきていない（聞手の期待に沿えない）状況であると判断し、それを「あ」でマークすると考えられる。

17 （現在アメリカ東部に住んでいる家族のもとへ……）

義母：漫画家なんですか？本か何か……見せてもらえる？

さおり：あ……持ってきてないです……（ダーリン2）

#### 5. 4. 否定表現が後続する「あ」

最後に「あ」に否定表現が後続する例をみていく。

18 津崎：なんですか！ 35年が一瞬で埋まりましたよ！

日野：35年？

津崎：あ、いや

日野：寂しそうな背中だからハグしてこいって、沼田さんが  
（逃げる）

この例で「あ、いや」は相手による「35年（とは何の年数か）」という問いを否定しているわけではない。「いいえ」に変えられないのもそのためだろう。弁別刺激（「35年？」）の内容を否定しているのではなく、弁別刺激に対して「聞手が疑問に思っている」と判断し、その聞手が疑問に思っている状況を否定しているものと考えられる。次の19も同様に「その親指……何？」という相手の発話を「聞手がいぶかしく思っている」と判断し、その状況を否定し、撤回している。

19 トニー：なんでそんなこと知りたいの？

さおり：ん～人のいろんな形をかみしめたいと思ひまして

トニー：でもそういうことを取りあげられるのがイヤだって人も中にはいるから気をつけないとダメだよ

さおり：でも私としては「違い」には「魅力」があると思うんだけどなあ。そしてまた「違うもの」を排除しがちな日本社会

にですね「違っていい」ということをお伝えしたいと……

トニー：ちょっと。その親指……何？

さおり：あっいや、トニー今鼻がかゆいんじゃないかなーと思って

……

トニー：かゆくはないです (ダーリン2)

次の20も「いいえ」に変えられない。「いいえ」に置き換えると、まるでクイズに答えるかのような問答になる。これは弁別刺激（「奥さまですか？」）を「伴侶がいると思われている」と判断し、その状況の否定と考えられる。

20 コンシュルジュ：何をお探しでしょう

津崎：……女性への贈り物なんですが

コンシュルジュ：奥さまですか？

津崎：あ、いえ

コンシュルジュ：妹さん (逃げる)

ここでも「あ」が相手の発話を「疑問に思っている」「怒っている」「誤解している」等と不都合なものとして判断し、その状況を訂正する。弁別刺激から判断し、即座に否定・訂正することから、「慌て」といった情動が生じる。もう少し例を挙げよう。

21 桜：保育園みつけたんだ

葵：ようやく。でも、仕事して梢の世話して、ちがやさんの面倒まで見る自信なくて

みくり：……

桜：育て方が悪くて、ごめんなさい

葵：あっ、そういうつもりじゃ！

桜：私は専業主婦だったし、家事が趣味みたいところがあったからやりすぎたのかも (逃げる)

22 トニー：例えばある会社があって「まだ実績をあげていない状態」つていうのを一言でいう単語ない？

さおり：……実績をあげてない!? なにそれ……むつかしーうーん

……ないと思うけど……（でもあるかも知れないし……ど  
う判断すればよいのか）

トニー：あ、いーよーいーよなければ……

さおり：ごめん……（ダーリン）

これらの例でも、相手の発話を21は「誤解している」、22は「相手が困っている」と判断し、それを改めようとする。状況の修正が「慌て」の解釈を生起させる。

## 5. 5. 仮説の検証

以上の考察では「あ」を「弁別刺激に対して、①それを同定・描写する、②それに関連する情報を取り出す、③それが不都合なものであると判断するといった反応を示すマーカーと考え、それにより「あ」の例が説明できることを見てきた。ここで弁別刺激の同定、描写、関連情報の取り出し、そして弁別刺激からの状況判断といった話手の認知事象を、ひとまず本研究では「気づき」と名付けておきたい。すると「あ」は「気づき」マーカーであると表現できる。そこで本小節では、この「あ」の捉え方が妥当であることを、他の「あ」の運用例、または「あ」が使用できない例を見ていくことにより確認する。

まず、次の23と24は相手の発話（弁別刺激）に対して、休止を表す「……」や「えーっと」が後続する例である。これらは相手の発話内容に対する適切な返答がすぐにできない例である。

23（ホテルの和食屋さんにて）

母：返品不可ですけどいいかしら？

見合い相手：あ……はい……大丈夫です（ダーリン）

24 さおり：あれ？どーしたのトニー

トニー：どうしてそんなこと言うの…？お姉さんいいところいっぱいあるじゃない

姉：あ……えーと……ありがとうございます（ダーリン）

このような話手が戸惑っている状況で使われる「あ」はどのように説明で

きるだろうか。「あ」を「気づき」と考えれば、話手がすぐに対応しかねる状況において、とりあえず相手に対して反応はしていること（気づいていること）を相手に示す働きを「あ」が果たしていると考えられる。次に、相手の発話が弁別刺激となり、「あ」に「はい」が後続する例を見てみよう。

25 生徒：先生。頭、痛いんで、保健室に行っていいですか？

つむぎ：あ。はい

有無を言わせない空気に圧倒され、つい許可してしまった後で、松崎先生を見る。（ラスト）

26 風見：聞いてませんか？僕と津崎さんと、みくりさんをシェアするって話

みくり：……シェア？

風見：シェア

みくり：……

風見：みくりさん？

みくり：あ、はい。ちょっと、意味が分からなくて

風見：すみません。一旦忘れてください

みくり：はっ？（逃げる）

これらの例で「あ」が使われていると、「慌て」の情動が読み取れる。「はい」による応答の前に「あ」により「気づき」反応を示すことで、相手の発話に「気づき」、即座に「はい」と肯定したことが示されるため、慌てて承諾したという解釈が生じるものと考えられる。逆に次のような例では「あ」が使えない。

27 祖父：おーい、わしのめがね見なかったか？

祖母：{え？/#あ}わたしは知りませんけどねえ……（マンガ）

28（めげずに試着しないでいいものはひそかに買って置く）

夫：なんかカチッとしすぎないズボン……あるといいなあ  
（クローゼットの中を探す）

妻：{おっ/#あっ}、来た！（ダーリン）

27は「わたしは知りません」という発話から分かるように、関連情報の取

り出しができない。この場合「あ」が使えない。28は聞手の発話を弁別刺激とする例だが、言語場維持を目的とする聞手解釈への配慮（それによるいずれの変更）も必要とせず、そのため「あ」が使えない。以上のことから「あ」を「気づき」反応のマーカ―と捉え、その機能を持つ「あ」を用いることによって、聞手に伝わる発話の解釈が変化すると考える本研究の見方は「あ」の運用例を説明できるものであると考えられる。次節で本研究の「あ」の捉え方をまとめて示す。

## 5. 6. 結論——「あ」の中核的機能と外延的事象

本研究では「あ」を次のように考える。

「あ」：弁別刺激に対する「気づき」を表すマーカ―である。ここでの「気づき」とは下記を包括したものである。

- ①同定・描写、②関連情報の取り出し、③弁別刺激の内容からの状況判断

この「あ」は運用されて下記のような役目を果たす。

- ・「気づき」を表明し、他者を介入させることにより言語場を創設する。
- ・「気づき」を表明することで、「聞手の面子を保つ」、または「話題の区切りを明示する」。それにより聞手との言語場が保持される。
- ・「気づき」に訂正・謝罪・否定表現を後続させることで「慌て」の情動が表明され、聞手との言語場が保持される。

このように「あ」は「言語場の創設」と「創られた言語場の保持」、つまりは他者との言語コミュニケーションを開始し（言語場の創設）、それを友好的に持続させる（言語場の保持）ことに貢献する言語形式であると考えられる。

## 6. おわりに

以上、本研究では一音節語「あ」についてその中核的機能を「気づき」マーカ―とし、それが運用される場合を確認し、「あ」が他者とのコミュニケーションをとるための言語場の創設と、創設され他者が聞手となった

場合に、聞手との言語場の友好的保持に貢献するマーカーであると結論付けた。今後はこれが妥当であることを示すため、またはこれをより厳密化するため、他の一音節語との対照研究、実際の会話を用いた考察等を行う予定である。また、「慌て」といった情動の生起を確認するため非言語行動の考察についても模索していきたい。

## 注

- (1) 本稿では、(例えば口頭語の場合で言えば) 音声という手段で資材言語を用いて意味を現成し、それを聞手に向けて伝えることを「運用」と言い表し、ある状況において、ある形式を選んで用いるという個別的な行為の表面的側面を「使用」と言い表す。
- (2) 森重(1959)は「伝導」と「伝達」という2つの全く異なる意味の伝わり方を次のように説明している。「ものを指すことによっても、ひとはものについての或るなにごとかを理解しえなくはない、しかしながらこの表現と理解とは、まったくその場限りのものであり、まさに伝導として一方のひとから他方のひとに伝わるだけであり、伝導が終ると、二人のひとは、まったくもとのそれぞればらばらの個性的断絶に戻ってしまう。一般的な概念を通さないから、二人の構成する現場はその場で崩れてしまい、その直接的な指示は、同じその或るなにごとかを意味するものとして繰返し使うにたえない。言語が繰返し使うことができ、伝導ならぬ伝達を可能にするのは、そのもつ意味が言語場において客観性をもち、ひととひとを概念によって共同につないでいるからである。外的な指示によってではなく、内的な分析によるからである。」(pp.16-17)
- (3) 一語文「花!」には一つのもんが内在し、主語述語的判断をその内実とする。
- (4) これは挨拶語と比べると明らかである。挨拶語は文法的陳述作用を殆ど必要としない、直観的・伝導的なものである。それに対し「あ」は一語文相当の主述関係を内包する反省的なものである。
- (5) 『新明解国語辞典第7版』では「ああ」を感動詞とし「①肯定、承知の意を表わす言葉。「ああ、そうでしたか」②物事に感じた時に発する叫びに似た声。(感嘆・悲しみ・喜び・嘆きなどを表わす)」としている。「あ」「あっ」の意味記

述については3.1を参照。

- (6) 「感動詞は本来、聞手の存在とは切り離された記述がなされるべきであり、その意味では、機能的側面を見ることが重要視されなければならない」(p.238)
- (7) 「あ」は話手の探索意識の有無に関与しない点が「わ」との違いであるとされる。
- (8) これは富樫(2005)も認めている。
- (9) 刺激は常に受けているが、それに反応するものとししないものがある。反応しないものを中立刺激と呼ぶのに対し、それによる反応が起きるものは弁別刺激と称される(小野2016)。
- (10) 「同定」とは中島他編(1999)において下記のように定義される話手の認知操作である。「同定(identification): 刺激対象の知覚特性と連合する様相の異なる情報を取り出すこと」。中島他編(1999)ではこの定義の前に、次のような説明がなされている。「長い間会っていなかった知人と再会したとき、顔は覚えがあるのに、名前を思い出せない、という経験をすることがある。このような場合、名前を思い出すと、その知人が誰か同定できたことになる。つまり、知人の顔は“記憶”にある顔と知覚的に一致しており、その状態からさらに名前を呼び出すことによって同定が成立する。」(p.631)
- (11) このことは森重(1959)の下記の箇所からも読み取れる。「(いわゆる挨拶という言語表現は: 引用者補足) 極言すると、わかりきった意味の交換であり、〈話題〉というほどのものでさえない。それにもかかわらず挨拶の言語表現が交わされるのは、ただその言語を手段として両者が親和し、第一次的に言語場を構成しようとする目的のためである。」(pp.30-31)
- (12) 「あ」がなければ「慌て」の解釈は音調や表情でそれを明示しない限りは生じない。

## 引用文献

- 小野浩一(2016)『行動の基礎 豊かな人間理解のために 改訂版』、培風館
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」、音声文法研究会編『文法と音声』、pp.257-279、くろしお出版
- 富樫純一(2005)「驚きを伝えるということ—感動詞『あっ』と『わっ』の分析を通して—」、串田秀也・定延利之・伝康晴編『シリーズ文と発話第1巻 活動としての文と発話』、pp.229-251、ひつじ書房
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司編(1999)

『心理学辞典』、有斐閣

松村明監修（2017年5月18日更新）『デジタル大辞泉』、小学館

森重敏（1959）『日本文法通論』、風間書房

森山卓郎（1996）「情動的感動詞考」、『語文』65、pp.51-62、大阪大学国語国文学会

山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編（2017）『新明解国語辞典 第7版』、三省堂

## 例文出典

（いつか）いぬじゅん『いつか、眠りにつく日』スターツ出版／（ダーリン）小栗佐多里『ダーリンは外国人』メディアファクトリー／（ダーリン2）小栗佐多里『ダーリンは外国人2』メディアファクトリー／（ダーリンの頭2）小栗佐多里&トニー・ラズロ『ダーリンの頭ン中2』メディアファクトリー／（逃げる）野木亜紀子『逃げるは恥だが役に立つ シナリオブック』講談社／（マンガ）創作集団にほんご『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化——多辺田家が行く!!』アルク／（ラスト）浅海ユウ『ラストレター』スターツ出版

（まつおか みゆき・愛知文教大学・准教授／本学・非常勤講師）

